

# 英語名詞句の内部構造の精緻化について

## ——限定詞の生起位置に関する理論的可能性に関する考察——

増 富 和 浩

1. はじめに
2. DP 分析 (Abney(1987)) の妥当性に関する検討
  - 2.1. DP 分析における限定詞の生起位置について
  - 2.2. 主要部 D の果たす機能について
3. 限定詞の生起位置について—X バー理論の観点からの考察—
4. 主要部 D の機能について—Phase 理論の観点からの考察—
5. まとめ

### 1. はじめに

本稿の目的は、英語名詞句に対して従来想定されてきた統語構造を、統語論研究の最新の枠組みであるフェイズ理論の観点から、さらに精緻化することにある。

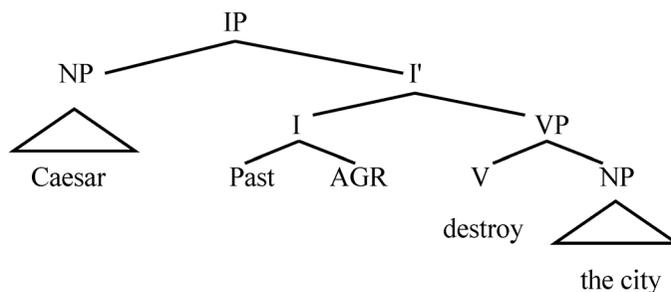
生成文法研究における研究課題の1つとして、節と名詞句の構造的並行性の追求の問題がある。具体的には、例えば、(1a, b) に示すように、節と名詞句には、統語的・意味的類似性があることは広く知られているが、このような言語の持つ特性が統語構造の点からどのように保証されるかを示すことなどが求められてきた<sup>1)</sup>。

- (1) a. Caesar destroyed the city.  
 b. Caesar's destruction of the city

この問題に関しては、従来、Abney (1987) が提案する DP 分析に基づく説明がなされてきた。DP 分析では、名詞句の最大投射を、従来の語彙範疇 NP (Noun Phrase) から機能範疇である DP (Determiner Phrase: 限定詞句) に変更することにより、X バー理論 (X' theory) の観点から、最大投射内における節と名詞句との構造的並行性が確保されるという主張がなされている。つまり、(2a) の節構造と (2b) の伝統的な名詞句の構造を比較すると、I' の内部と N' の内部の構造に関して、いくつかの相違を指摘することができるが、(2a) と DP 分析が提案する (2c) の比較においては、そのような相違点が解消されていることが確認できるであろう<sup>2,3)</sup>。

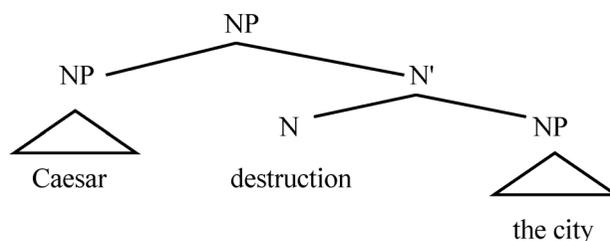
(2) a. 節の構造

Caesar destroyed the city.



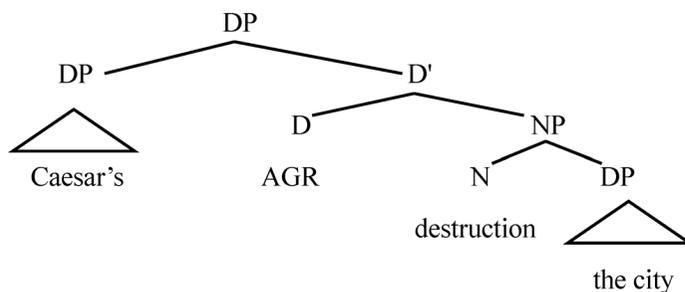
b. 伝統的な名詞句の構造

Caesar's destruction of the city



c. DP 分析による名詞句の構造

Caesar's destruction of the city



しかし、Abney (1987) 以降の理論の進展を考慮に入れば、DP 分析の主張にも改善すべき点が指摘され、少なくとも以下の点については、さらなる検討が求められるところである。

- (3) a. 限定詞 (a, the, this, that, など) の構造的位置の再考。
- b. 主要部 D の持つ統語機能についての再考。
- c. Phase 理論における DP の位置づけについての考察。
- d. 談話解釈における DP の位置づけについての考察。

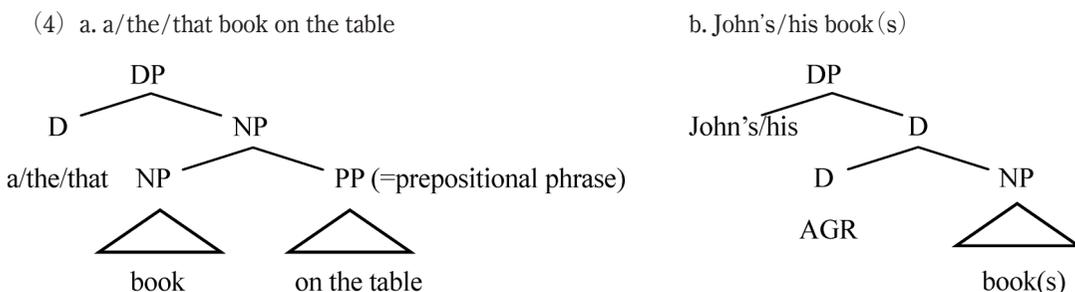
(3a) は、DP 構造において、定冠詞、不定冠詞や指示代名詞の生起位置がすべて主要部 D であるとする DP 分析の妥当性を再考する必要性を指摘したものであり、(3b) は、各限定詞と名詞主要部 (the book などの book) との間的一致 (agreement) 現象 (例えば、a book/\*books や the book/books など) における主要部 D が果たす機能を解明する必要性を指摘したものである。また、(3c)

および (3d) は、Phase 理論の観点から、DP が派生の単位としてインターフェイス部門（調音・知覚体系および概念・意図体系）に転送（Spell Out/Transfer）される対象となり得るかという点に関する問題である。本稿では、紙面の都合上、(3a) と (3b) の問題について焦点を当てて考察することにする。3 節では、(3a) について議論し、4 節では (3b) に関する考察を示す。5 節は本稿のまとめである。

## 2. DP 分析（Abney（1987））の妥当性に関する検討

### 2.1. DP 分析における限定詞の生起位置について

限定詞と呼ばれる統語範疇には、定・不定冠詞、指示代名詞、および his や John's などの名詞や代名詞の属格形が含まれるとされるが、Abney（1987）の DP 分析では、名詞句の内部構造における最大投射は、限定詞句（Determiner Phase：DP）であり、その主要部 D には、定・不定冠詞や指示代名詞等の限定詞が生起し、DP 指定部には John's などの名詞の属格形が生起すると提案されており、その構造は概ね以下のように示される<sup>4)</sup>。

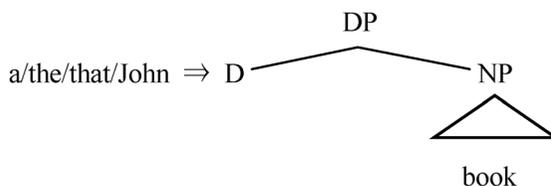


このような分析に基づけば、限定詞を伴う名詞句は、すべて DP を最大投射とする限定詞句として定義することができる。ただし、同じ限定詞類であっても、定・不定冠詞や指示代名詞は主要部 D 位置（cf. (4a)）に生じ、人称代名詞や固有名詞の属格形は DP 指定部位置（cf. (4b)）に生じており、その生起位置が異なっているという点に注目すべきである。なぜなら、限定詞に分類される要素には、次のような共起制限があるからである。

- (5) a. \*John's the book/\*the John's book      (←各用例中の「\*」は非文法的であることを示す。)  
 b. \*John's a book/a John's book  
 c. \*John's that book/\*that John's book  
 d. \*that the (or a) book/\*the (or a) that book

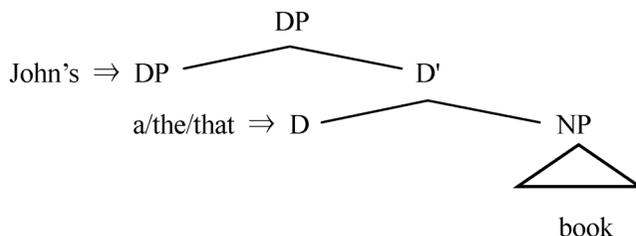
(5) が示していることは、限定詞に属するとされる各要素は、同一名詞句の中において共起することができないということであるが、このような現象に対する従来の説明は、限定詞は構造上同一の位置（例えば、主要部 D）に生起するため、同時に 2 つ以上の限定詞が生起しようとするならば、(6) に示すように、1 つの生起位置を取り合うことになり、結果として、非文法的であるとの分析によるものである。

(6)



従って、(6) に示すような従来の説明が正しいとすると、(4a, b) に示す Abney (1987) の分析では、定・不定冠詞や指示代名詞 (a, the や、that など) と、名詞の属格形 (John's など) が、異なる位置に生起することになるため、(7) に示すように、John's the (or a/that) book などの英語では非文法的とされる表現を誤って文法的であると予測してしまう可能性があり、限定詞の位置についての妥当性について、再検討が求められるであろう。

(7)



このような指摘に関して、Abney (1987) の DP 分析では、以下のような仮定を用いて説明している。

(8) AGR in D does not co-occur with lexical determiners. (Abney (1987: 271))

仮定 (8) が述べていることは、定・不定冠詞 (a, the) や指示代名詞 (this, that など) が、DP の主要部 D の位置に生じるときは、AGR (属格形態素の 's を付与する要素) が D に生じることができないということであるが、John などが属格形で生じるためには、属格を付与する AGR が生じる必要があるため、結果として、John's や his などは、a, the や that などと共起できないという事実に対する説明と解釈できる。このような説明により、Abney (1987) の提案では、(5) が示すような事実に関する問題を一応解決していると言えるかもしれない<sup>5)</sup>。

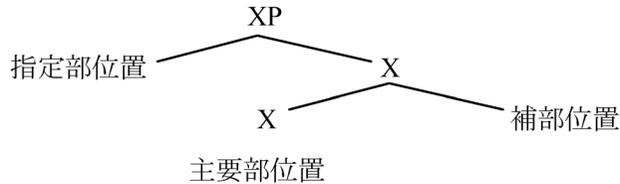
しかしながら、上記の共起制限に関する問題が解決したとしても、Abney (1987) の分析に対しては、さらに、(9) が示す事実に基づき、that などの指示代名詞が生起する位置に関する疑問が指摘できる。

- (9) a. John bought a \*(car). (←\*( ) の表記はカッコ内の要素が省略できないことを示す)  
b. John bought a car. I like John's car/that car/the car.  
c. John bought a car. I like John's/that/the \*(car).

(9a) から (9c) が示しているのは、同じ限定詞であっても、John's や that と異なり、a や the を単独で言語表現に用いることはできないという事実であるが、このような特性の違いから考えれば、Abney (1987) の主張とは異なり、むしろ John's や that が生じる位置についての共通性を指摘でき

るように思われる。生成文法における構造構築に関する基本原理では、各投射の指定部位置 (cf. (10)) に生じることができるのは、自立して言語表現に生起することができる要素 (つまり、最大投射) であるとされている。

(10)



このような原理から考えると、要素の自立性について共通した特性を持っている John's や that などの要素が同じ位置 (つまり、DP の指定部位置) に生じ、言語表現中に単独で存在することができない (つまり、最大投射ではない) a や the などの冠詞類が主要部 D の位置に生じるとするのが妥当だと考えられるが、すでに (4a, b) に示したように、Abney (1987) の分析では、that が a や the と同様に主要部 D に生起するとしており、再考の余地があると指摘すべきであるが、この疑問に対する検討は 3 節で示すことにする。

## 2.2. 主要部 D の果たす機能について

前節の議論とは別に、Abney (1987) の DP 分析に関しては、(11) が示すような、主要部 D が果たす形態的な一致に関わる機能に対する疑問を指摘しなければならない。

- (11) a. a book/\*books  
 b. the book/books  
 c. that book/\*books  
 d. those \*book/books

(11) のような事実は、a、the および指示代名詞には、同じ限定詞類に属する要素であっても、後続する名詞との間で、数に関して、形態的な一致を示すかどうかについて違いがあることを示している。つまり、不定冠詞 a や that/those のような指示代名詞は、後続する名詞が表す数の情報に対して形態的に一致しなければならないが、定冠詞 the はそのような一致現象は示さないということである。このような事実は、もし Abney (1987) が主張するように、定・不定冠詞と指示代名詞がすべて、主要部 D に生起するとすれば、主要部 D の持つ機能が、形態的な一致に関して一定していないこと (つまり、主要部 D の性質が (少なくとも一致現象に関して) 統一的に決定できないこと) を指摘していることになる。別の言い方をすれば、DP 分析においては、主要部 D には、形態的一致を示す D と、示さない D との 2 種類が存在するという奇妙な予測につながり、Abney (1987) の分析の説明的合理性に対して、疑問を投げかけることができるであろう。この問題に対する検討は 4 節で示すことにする。

以上、前節と本節の議論を要約すると、以下のようなものである。

(12) Abney (1987) の DP 分析に関して、

a. DP 投射内で、限定詞類（特に that などの指示代名詞）の生起位置には再考の余地がある。

b. 主要部 D が持つ形態的一致に関する機能については再考の余地がある。

次節以降では、(12a, b) に示す疑問について、生成文法の基本原則である X バー理論、および最新の理論的枠組みである Phase 理論の観点から、代案を示すことにする。

### 3. 限定詞の生起位置について—X バー理論の観点からの考察—

まず、(12a) に示した限定詞類の生起位置について、構造構築の原理に基づいて、改めて考察することにする。すでに、(9) で示したように、John's や that などと、the や a とは、言語表現における生起状況に違いがあり、前者は単独で言語表現中に生じることができるが、後者は単独で生じことはできない。このような事実は、(13) や (14) が示すように、他の統語範疇についても観察されるものである。

(13) a. Taro lives \*(in Sendai).

b. Taro slept (in this bed).

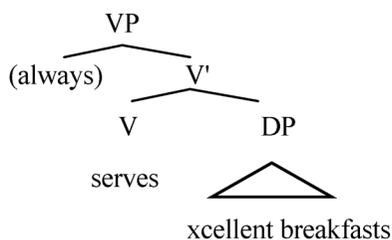
(14) a. The hotel (always) serves excellent breakfasts.

b. You must take your umbrella (just) in case.

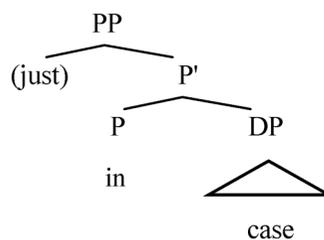
(13a) のように、動詞句の主要部に後続する要素が義務的に生じなければならない場合、両者は主要部と補部の関係（上記の例では、lives と in Sendai の関係）であるとされ、構造上は、それぞれ (10) に示した主要部位置と補部位置に生起するとされている。この関係は、a や the に見られる関係（例えば、a \*(car) や the \*(car)）と類似している。このような点から考えれば、a や the の冠詞類は、Abney (1987) の分析のように、DP 構造内での主要部の位置を占めるべきであると考えられるであろう。

一方、(14) に見られるように、always や just のような主要部要素の前に生じ、その生起が随意的である場合、それらの要素の構造上の位置は、(10) の指定部位置であると考えられている。（説明を簡潔にするために、(15) では必要な部分のみの構造を示す。）

(15) a. 動詞句の構造



b. 前置詞句の構造



これらの関係は、名詞の属格形や指示代名詞などが示す関係（例えば、I like (John's/those) cars に見られる John's や those の随意性）に類似しており、このような点に注目すれば、John's や that/

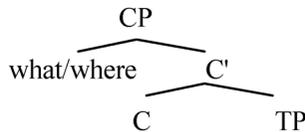
those などが統語構造上に占める位置としては、指定部位置が妥当であると考えられ、Abney の分析と比較すると、that など指示代名詞が生じる位置が異なっている (Abney (1987) では、指示代名詞は DP の主要部位置である)。

さらに、Di Sciullo (2005) の指摘に基づけば、that の生起位置に関しては、what や when などの疑問詞との形態論的な類似性から、興味深い指摘をすることができる。

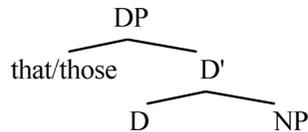
- (16) a. that = th + at  
 b. then = th + en  
 c. what = wh + at  
 d. when = wh + en

(16) が示していることは、一見異なった語彙に見える that や what などには、形態素の構造の点からの類似性が指摘できるということである。つまり、that や then のような指示詞は、指示性を表す th という形態素に at (場所を表す形態素) や en (時を表す形態素) を組み合わせることで形成され、what や when のような疑問詞も疑問を表す wh という形態素に at や en という形態素を組み合わせることで形成されているということである<sup>6)</sup>。このような類似性に注目した上で、生成文法研究において、what などの疑問詞の構造上の位置が、典型的な指定部位置 (補文標識句 (Complementizer Phrase : CP) の指定部位置) であると考えられていることに基づけば、that など指示代名詞の生起位置が、上で述べたように、やはり DP の指定部位置とすることには妥当性があると考えられる。

(17) a. 疑問詞の位置



b. 指示代名詞の位置



一方、定冠詞の the も指示的な意味を表すという点で、th 語の一種と考えられるが、the の場合は、th の後に続く明確な形態素がなく、発音の要請により (つまり、音節を形成するために) 最低限の母音 (/ə/) が加えられたにすぎないと考えれば、that などとは異なり、単独で指定部に生起することはできず、主要部 D に生じ、義務的に補部を伴うことで音韻的な支えを得ていると考えることは無理のないように思われる。

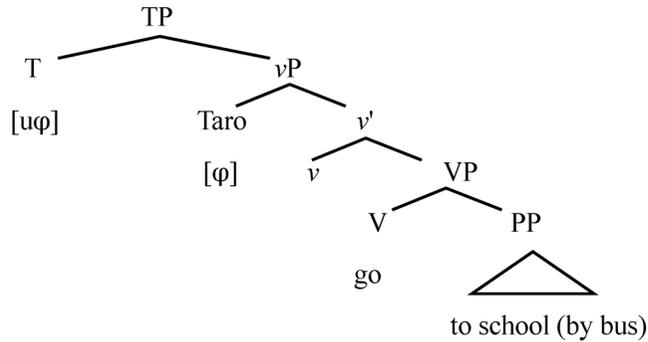
#### 4. 主要部 D の機能について—Phase 理論の観点からの考察—

次に、(12b) で示した DP の主要部 D の持つ機能、具体的には、DP 内における限定詞要素と名詞との形態的一致関係 (that/\*those book や \*that/those books) を成立させる機能について考察することにする。

Phase 理論の下では、例えば節の主語と動詞の形態的一致関係 (Taro \*go/goes to school by bus など) が成立するメカニズムは以下のように説明されている。(説明を簡潔にするため、(18) にお

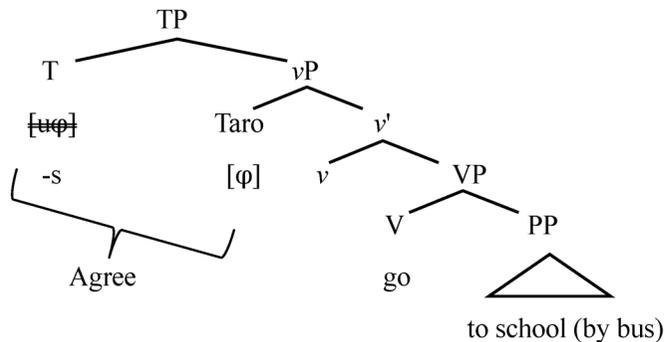
いても、現在の議論に対して最低限必要な部分について、若干の簡略化を施して説明することにする。) )

(18) Taro goes to school (by bus).



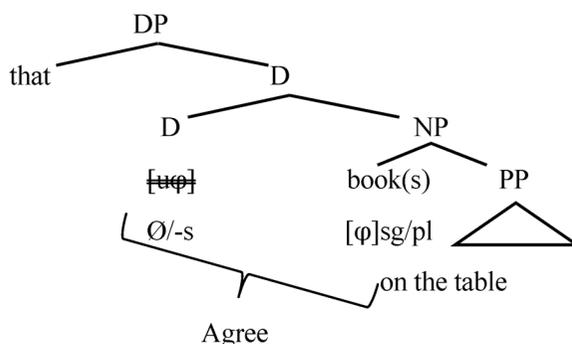
(18) における三人称単数の主語 Taro と動詞 goes の形態的な一致は、Phase 理論では、時制 (tense) 要素 T を仲立ちとして、Agree と呼ばれる一致操作によって説明されている。ここで、主語の Taro や T の持つ [φ] および [uφ] は、一致操作に関わるファイ素性 (φ-feature) と呼ばれる素性で、人称・性・数に関する素性の集合体 (たとえば、 $\phi_{\text{Taro}} = \{3\text{rd-person, masculine, singular}\}$ ) であると考えられている。なお、T の持つ素性に付された u という記号は、その素性が解釈不可能な素性であることを表しており、Phase 理論では、解釈不可能な素性が派生の最終段階まで残った場合は、その派生が非文法的になるとされている。従って、(18) の派生においても、T と Taro の持つファイ素性の間で一致操作 (同種の素性の照合と削除) を行い、解釈不可能な素性が除去されなければならないが、一致操作の結果、(19) に示すように、T の [uφ] が削除され、この過程で、T の形態的特性が三人称単数 (-s) と確定され、それが動詞 go と発音段階で組み合わせられることにより、文法的な文 (Taro goes to school (by bus) など) が形成されると考えられている<sup>7)</sup>。

(19)



さて、以上のような一致操作の過程が、統語構造の派生において一般的に適用されると考えると、本稿で議論している DP 投射内における限定詞類と名詞との一致現象、例えば that book/\*books や those books/\*book も以下のように説明されるであろう。

(20) that book/those books (on the table)

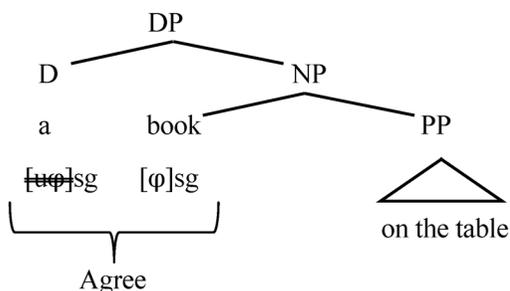


名詞句の派生においても、主要部 D と名詞 book(s) が、人称・性・数に関わるファイ素性を持ち、D の持つファイ素性が解釈不可能（つまり、 $[u\phi]$ ）と考えられているので、(19) の場合と同様に、D と books の間でファイ素性の照合・削除が行われ、D の  $[\phi]$  が派生から除去されるとともに、D の形態的な特性が決定されると考えられる。ただし、名詞が持つファイ素性は、数の情報に関して、単数 ( $[\phi]$ singular) の場合と複数の場合 ( $[\phi]$ plural) とがあるため、一致操作の後の D の形態もゼロ形 ( $\emptyset$ ) か複数形 (-s) の 2 通りとなるであろう。

なお、(20) の派生において、複数形の一致が行われた場合、DP 指定部の that ( $/\delta\alpha\epsilon t/$ ) と主要部 D の -s ( $/z/$ ) の音が、発音の段階で（音韻的な調整を受けて）組み合わせられることで、最終的に those ( $/\delta\theta u:z/$ ) という発音が決定されると考えれば、指示代名詞に（一見）単数と複数の 2 種類の綴りがあることは、発音の結果であると考えられることもできるかも知れない。

一方、前節において、定・不定冠詞 (a や the) の生起位置は主要部 D、名詞の属格形 (John's) の生起位置は DP 指定部と考えるのが妥当であり、Abney (1987) の分析が支持できることを確認したが、これらの場合の派生についても、以下のように考えられるであろう。

(21) a book/\*books (on the table)

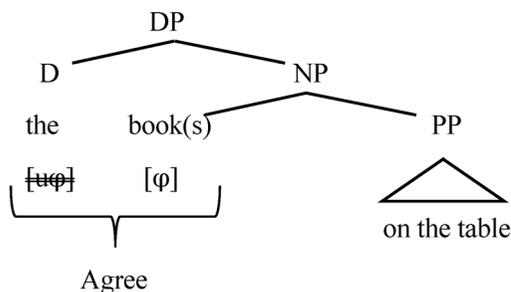


まず、不定冠詞 a は主要部 D に生起し、一致に関わる解釈不可能なファイ素性を持つと考えられるが、that などとは異なり、a の持つ意味特性から、数の情報が単数のみに限定された  $[u\phi]$ singular を持つと考えることは無理がないであろう。この結果、一致操作の相手となる book などの名詞のファイ素性が  $[\phi]$ singular の場合のみ一致操作（素性の照合・削除）が成立すると予測できる。仮に、ファイ素性が  $[\phi]$ plural の名詞と一致操作をしようとした場合には、素性の照合が（単数と複数間で）ミスマッチとなり、結果として一致操作が成立せず、非文法的な派生 (\*a books) と

なるであろう。

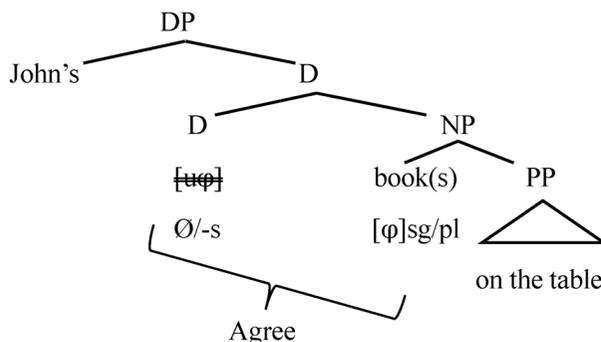
次に、定冠詞 the が主要部 D に生起する場合には、(that の場合と同様に) 主要部 D が数の情報に関して無指定であるので、解釈不可能な [uφ] を持ち、(22) に示すように一致操作が成立することで、the book/books などの名詞句が派生されると考えられるであろう。ただし、一致操作の結果、主要部 D の形態的特性が、∅/-s となった場合に、英語の定冠詞 the には、複数形の発音形態が(偶然)存在しないために、結果的に the book/books と発音される点は注意すべき点であろう。

(22) the book/books (on the table)



最後に、John's などの名詞の属格形が限定詞として DP の指定部に生起する場合の派生も、基本的には上述の (20) の場合と同様に説明できるであろう。

(23) John's book/books (on the table)



(23) に示すように、主要部 D と book(s) などの名詞との一致操作の結果、D の形態的特性が ∅/-s に決定されるが、発音に関しては John's にはすでに属格形の (-s: /z/) が付加されているため、単数・複数いずれの場合も John's (/dʒʌnz/) であると考えられる。

以上のように、DP 内に生じる限定詞類とそれに後続する名詞との間の形態的な一致現象において、主要部 D が果たす機能に関して、Phase 理論の観点から、それぞれの限定詞類の場合を見てきたが、Abney (1987) の分析の当時には存在していなかった素性の照合・削除という概念を考慮に入れることで、いずれの限定詞が生起した場合も、主要部 D の機能は、book(s) などの名詞との一致操作を駆動し名詞句全体の派生を収束させることであると、統一的に述べることができるであろう。

## 5. まとめ

(12a, b) で指摘した Abney (1987) の DP 分析に対する問題点に対する 3 節と 4 節の議論の結果をまとめると、以下のとおりである。

(24) a. DP 投射内で、限定詞類（特に *that* などの指示代名詞）の生起位置には再考の余地がある。 (= (12a))

⇒ DP 内において、定・不定冠詞は主要部 D の位置に生起し、指示代名詞と名詞の属格形は DP 指定部に生起すると考えるのが妥当である。したがって、指示代名詞が主要部 D の位置に生起するとする Abney (1987) の主張は、この点に関して修正の必要があると考えられる。

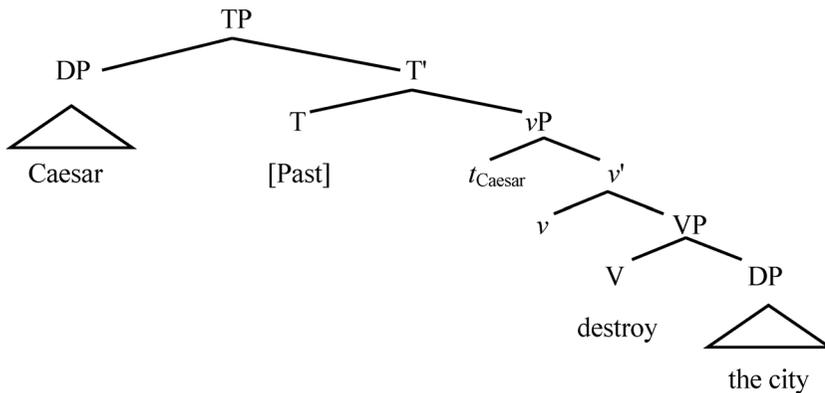
b. 主要部 D が持つ形態的一致に関する機能については再考の余地がある。 (= (12b))

⇒ 名詞句の示す形態的一致現象において、主要部 D の機能は、自らの持つ解釈不可能な  $[u\phi]$  を派生から削除するために、名詞の持つ解釈不可能な  $[\phi]$  との間で一致操作を駆動し、自らの  $[u\phi]$  を照合・削除することで、派生を適正に収束させることである。結果として、Abney (1987) が仮定していた機能範疇 AGR を排除することができ、理論全体の簡潔性を高めることができる。

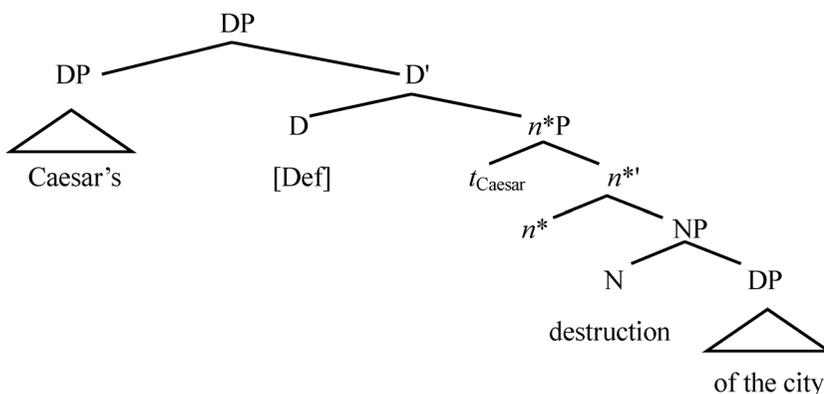
### 注

- 1) (1a, b) における統語的類似性は、具体的には、節と名詞句の主要部となる *destroy* と *destruction* が、それぞれの表現において、ともに主語と目的語と共起している点などがあげられる。
- 2) (2c) は、Abney (1987) が DP 分析を提案した当時の名詞句の造を示す。最新の提案は注 3) を参照。
- 3) 最新の生成文法理論では、VP シェル分析、NP シェル分析や Phase 理論の提案等により、節と名詞句の構造は概ね下記のように考えられており、(2a, c) において確認される節と名詞句の構造的並行性が、維持・進展している (Chomsky (2000, 2001, 2008)、Hiraiwa (2005)、増富 (2013) Radford (2000, 2004) などを参照)。

(i) Caesar destroyed the city.



(ii) Caesar's destruction of the city



- 4) (4b)において、主要部 D に生起する AGR (agreement) は指定部の固有名詞や人称代名詞 ((4b) では John) に属格 (-'s) を付与する機能範疇である。
- 5) なお、この後の議論で示すように、最新の理論では、AGR という要素は仮定せず、John などに対する属格 (-'s) の付与は、主要部 D 自体の統語特性によるものと説明されている。
- 6) このような点から、that などの指示詞を th 語、what などの疑問詞を wh 語と呼ぶことは広く知られている。もちろん、下の表に示すように、th 語と wh 語が全く並行的な語彙体系を有しているわけではない。

	+ o	+ at	+ ere	+ en	+ y	+ is
th 語	—	that	there	then	—	this
wh 語	who	what	where	when	why	—

- 7) なお、主語に対する主格の付与もこのような一致操作の結果として行われると考えられているが、一致操作に関わる詳細な説明については、Chomsky (2000, 2001, 2008) などを参照されたい。

## 参考文献

- Abney, Steven, Paul (1987) *The English Noun Phrases in Its Sentential Aspect*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquires: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowiz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Othero and Maria Luiza Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Di Sciullo, Anna Maria (2005) *Asymmetry in Morphology*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral Dissertation, MIT.
- 増富和浩 (2012) 「(不) 定名詞句の内部構造について : the + 形容詞の名詞性からの一考察」『ことばとところの探求』大橋 浩 他(編), 163-176, 開拓社, 東京.
- 大庭幸男 (1999) 「Phase としての名詞句表現」『言語研究の潮流—山本和之教授退官記念論文集—』稲田俊明 他(編), 21-36, 開拓社, 東京.

Radford, Andrew (2000) "NP-shells," Essex Research Reports in Linguistics 33, 2-20.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Abstract

# On Fine Structures of English Noun Phrases

—Remarks on the Theoretical Possibilities  
for Structural Positions of Determiners—

MASUTOMI Kazuhiro

The goal of this paper is to explore the structural position of English determiners (e.g. *a*, *the*, *that* or *John's*) within the framework of the Minimalist approach, that is, Phase Theory (cf. Chomsky (2000, 2001, 2008) among others). Concretely, I examine the structural positions of these determiners on the basis of the analysis proposed by Abney (1987)'s DP analysis, focusing on the internal structure of the noun phrases that contains them and their syntactic properties. In the course of the discussion, I propose a reanalysis of the DP analysis, from the viewpoint of Phase Theory. Such an analysis should have some implication for the syntactic theory of noun phrases or the DP structure.